

[原著論文]

極低出生体重児を育児している母親のQOLに関する 因果モデルの検討

押木利英子¹⁾、原田和宏²⁾、香川孝次郎³⁾、中嶋和夫³⁾、安藤隆男⁴⁾

キーワード：極低出生体重児 心理的QOL 母親 因果モデル ストレス認知

Validity of the Causal Model concerning the Mother who cares the Very Low Birth Weight Infant

Rieko Oshiki¹⁾, Kazuhiro Harada²⁾, Koujiro Kagawa³⁾, Kazuo Nakajima³⁾, Takao Ando⁴⁾

Summary

The purpose is to make clear whether to influence a side concerning mother's mental subjectivity in life which the mother who is the low birth weight infant's main caregiver has a low birth weight infant to and condition were recognized how. We find the hypothesis of the stress recognition → stress reaction → QOL referring to the stress recognition theory of Lazarus. It was verified by the co-variance structure analysis with a measurement measure as the stress recognition for a feeling of the child care burden, the stress reaction for burn out and QOL for mental QOL.

The mental QOL of the mother who cares a low birth weight infant is influenced directly from “the recognition of the activities limitation”, of a feeling of the child care burden, the negative influence is taken indirectly from “the emotional exhaustion” of burn out from “the recognition of the negative emotion” of a feeling of the child care burden at the same time as a result of the data analysis. It was proved that the negative influence was taken indirectly through the emotional exhaustion.

Key words : Very low birth weight infant, QOL, Mother, Causal model, Stress recognition

和文要旨

低出生体重児の養育者である母親が、低出生体重児の持つ生活上の問題や状態をどのように認知し、母親の心理的側面に影響を与えているかに着目した。Lazarusのスト

レス認知理論の概念枠組みを参考にし、ストレス認知→ストレス反応→QOLの仮説を導きだした。ストレス認知については育児負担感、ストレス反応はバーンアウト、そしてQOLは心理的QOLを測定尺度として採

1) 新潟医療福祉大学・医療技術学部・理学療法学科

2) 岡山県健康づくり財団総務企画課

3) 岡山県立大学・保健福祉学部・保健福祉学科

4) 筑波大学大学院・教育研究科

押木利英子 新潟医療福祉大学 医療技術学部 理学療法学科

[連絡先] 〒950-3198 新潟市島見1398番地
TEL・FAX : 025-257-4450
E-mail : oshiki@nuhw.ac.jp

用し、共分散構造分析によって因果関係を検証した。

データ分析の結果、低出生体重児を育児している母親の心理的QOLは、育児負担感の「活動制限の認知」から直接的に、あるいは、バーンアウトの「情緒的疲弊」を経由して間接的に負の影響を受け、同時に育児負担感の「否定的感情の認知」からバーンアウトの「情緒的疲弊」を経由して間接的に負の影響を受けることが実証された。

はじめに

近年、極低出生体重児に対する医療技術が発達し極低出生体重児の生存率が上昇したことに伴い退院後のフォローや育児環境の充実が急務となっている。長期の入院が親子関係の形成を困難にすること、アレルギー疾患の罹患率が高いこと、発達障害の危険性が高いことなどで低出生体重児を育児することは健常児の育児に比してストレスフルなこととされ、それらの問題を可能な限り解消し母親のQOLをいかに向上させるのが、今後の大きな課題とされている。

極低出生体重児の運動発達や知的発達に多くの関心が注がれ、医学的にも教育学的にもさまざまな試みがなされている。しかし、低出生体重児を育児しているストレスフルな母親の問題解決に向けてはレスパイト・ケアに代表される「育児からの一時的解放」などの方略がなされはじめているものの、母親自身が育児に関するストレスをどのように認知、反応し、そして心理的安寧を得ているかということに着目した研究は見当たらない。

極低出生体重児の療育効果をあげるために、リハビリテーション医学や障害児教育の分野が連携し、母親をチームアプローチの一員とすることが重要視されはじめている近年において、極低出生体重児を育児している母親の心理的QOLを規定する要因を

解明することは必要な課題である。

目的

極低出生体重児を育児している母親のQOLを高めるための基礎資料を得るために共分散構造分析を用いて育児負担感及びバーンアウトと母親の心理的QOLの因果関係について検討する。

方法

1. 研究モデル

本研究ではLazarusのストレス認知理論の概念枠組みに従い、ストレス認知を育児負担感、ストレス反応をバーンアウト、QOLを心理的QOLとしてQOLに関する研究モデルを作成した(図1)。ストレス反応の結果として心理的QOLを測定した。QOLを目的変数とし、説明変数として育児負担感を外生変数に、バーンアウトを内生変数として設定した。

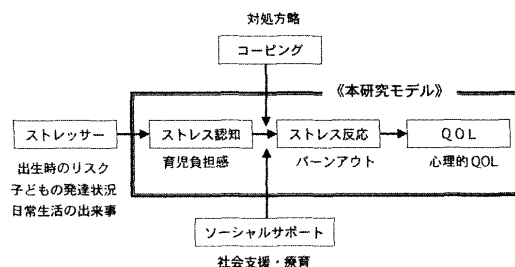


図1 低出生体重児の母親のQOLに関する調査研究モデル

2. 調査対象

対象は、N県N市内の新生児医療センターにおいて、1988年4月2日～1996年4月1日の間に体重1500g未満で生まれ、その後生存退院し、現在4～12歳の子どもを育児している母親276名である。

調査を行うにあたって、書面による説明で同意を得た。N市内の新生児医療センターを調査施設とした理由は、当センターがN県内唯一の新生児医療センターであり(1998

年まで)、県内の1500g未満の極低出生体重児のほとんどを医療管理をしているためであった。さらに調査対象は離婚や死別、子どもとの別離や死亡を事前にできる限り調査し、現在育児をしている母親を選定した。

3. 調査方法

方法は郵送による質問紙調査法で行った。調査はその目的と概要を記した調査協力依頼を同封の上、調査票を郵送し、回答のあった者のみに対して実施した。

調査期間は、2000年8月1日から31日まで1ヶ月間であった。

調査内容は、属性、育児負担感、バーンアウト、心理的QOLに関する項目で構成した。属性は年齢などの基本的属性、最終学歴、就労状況等の社会的属性、同居家族数、世帯構成、子どもの数等の家族に関する項目で構成した。育児負担感の尺度は、中嶋ら(1999)の「母親の育児負担感に関する尺度」¹⁾、バーンアウトの尺度は、原田ら(2000)の「バーンアウト尺度」²⁾に関する業績を参考に内容的妥当性を損なわないよう育児バーンアウト用に修正をしたものを

用いた。心理的QOLの尺度は、斉藤らの(2000)「心理的QOL指標(9項目版)」³⁾を採用した。

4. 調査項目と分析方法

育児負担感尺度として採用した「母親の育児負担感に関する尺度」の因子構造モデルは、中嶋ら(1999)の研究業績を基礎に、「活動制限の認知」「否定的感情の認知」の2因子を一次因子、「育児負担感」を二次因子として設定した。このモデルは、表1の質問項目F1、F2、F3、F4は因子「活動制限の認知」のみに、質問項目F5、F6、F7、F8は「否定的感情の認知」のみに因子負荷をもつ因子構造となっている。この二次因子モデルは、S県内の公立保育園を利用している子どもの母親において構成概念妥当性、基礎関連妥当性ならびに信頼性が検証され(中嶋ら、1999)⁴⁾、心身障害児通園施設を利用している障害児の母親において交差妥当性が検証されており(岩田ら、2000)⁵⁾、育児負担感の測定尺度として妥当性が認められている。

そのため、本研究では低出生体重児の母

表1 育児負担感の回答分布

因子	No	項目	度数(%)				
			全くない	たまにある	時々ある	しばしばある	いつもある
活動制限の 認知	F1	お子さんのために、自分には望ましい私生活(プライベート)がないと感じることがありますか	47 (22.9)	107 (52.2)	34 (16.9)	11 (5.4)	6 (2.9)
	F2	お子さんの世話が、自分が責任を負わなければならない家事等の仕事に比べて、重荷になっていると感じることがありますか	81 (39.5)	75 (36.6)	33 (16.1)	8 (3.9)	8 (3.9)
	F3	お子さんがいるために、趣味や学習、その他の社会活動などに支障をきたしていると感じることがありますか	75 (36.6)	80 (39.0)	30 (14.6)	15 (7.3)	5 (2.4)
	F4	お子さんの世話のために、かなり自由が制限されていると感じることがありますか	51 (24.9)	101 (49.3)	34 (16.6)	12 (5.9)	7 (3.4)
否定的感情 の認知	F5	お子さんのやっていることで、どうしても理解に苦しむことがありますか	63 (30.7)	91 (44.4)	28 (13.7)	15 (7.3)	8 (3.9)
	F6	お子さんとの関わりで、腹を立てることがありますか	7 (3.4)	90 (43.9)	48 (23.4)	44 (21.5)	16 (7.8)
	F7	あなたがお子さんにやってあげていることで、報われないと感じることがありますか	73 (35.6)	94 (45.9)	25 (12.2)	9 (4.4)	4 (2.0)
	F8	お子さんとの関わりの中で、我を忘れてしまうほど頭に血があがることがありますか	78 (38.0)	87 (42.3)	26 (12.7)	12 (5.9)	2 (1.0)

n=205

親サンプルに対する交差妥当性の検討を行った。得点化については、選択肢「いつもある」に4点、「しばしばある」に3点、「時々ある」に2点、「たまにある」に1点、「全くない」に0点を与え、得点が高いほど育児負担感が高いことになるように設定した。確証的因子分析を行うために、その適合度指標には、 χ^2/df (カイ2乗/degrees of freedom検定)、GFI (Goodness of Fit Index: 適合度指標)、AGFI (Adjusted GFI: 修正適合度指標) とRMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) を採用した。

バーンアウト尺度として採用した因子構造モデルは、原田ら (2000) の研究業績に基づき「情緒的疲弊」と「離人化」の二因子で構成する斜交モデルとした。このモデルは、表2の質問項目B1、B2、B3は因子「情緒的疲弊」のみに、質問項目B4、B5、B6は「離人化」のみに因子負荷をもつ因子構造となっている。この斜交モデルはO県内特別養護老人ホームに勤務する介護職

員において構成概念妥当性が検証され (原田ら、2000)⁶⁾、測定尺度として妥当性が認められている。

そのため、本研究では低出生体重児の母親サンプルに対する交差妥当性の検討と内部一貫性の確認を行った。得点化については、選択肢「よくあった」に2点、「時々あった」に1点、「なかった」に0点を与え、得点が高いほどバーンアウトが高いことになるよう設定した。確証的因子分析を行うためにその適合度指標には、 χ^2/df 、GFI、AGFIとRMSEAを採用した。

心理的QOL尺度として採用した「心理的QOL指数 (9項目版)」の因子構造モデルは、斎藤ら (1999) の研究業績に基づき、「現在の満足感」「心理的安定感」「生活のハリ」の3因子を一次因子、また「心理的QOL」を二次因子とする高次因子モデルとして設定した。このモデルは、表3の質問項目Q1、Q2、Q3は一次因子「現在の満足感」のみに、質問項目Q4、Q5、Q6は「心理的安定」のみに、また質問項目Q7、Q8、Q9

表2 バーンアウト項目の回答分布

因子	No	項 目	度数 (%)		
			なかった	時々あった	よくあった
情緒的疲弊	B1	子どもの世話で精神的にくたくたになった気がする	150 (73.2)	40 (22.4)	9 (4.4)
	B2	子どもの世話ばかりに追われ過ぎている感じがする	152 (74.1)	43 (19.5)	13 (6.3)
	B3	子どもの世話に非常にストレスを感じる	143 (69.8)	53 (25.9)	9 (4.4)
離人化	B4	子どもをまるで「物」であるかのように扱っている自分に気づくことがある	164 (80.0)	40 (19.5)	1 (0.5)
	B5	子育てが原因で、まわりの人に対して冷たくあたることもある	149 (72.7)	52 (25.4)	4 (2.0)
	B6	子どもが自分勝手なことばかりしているように感じることもある	101 (49.3)	97 (47.3)	7 (3.4)

n=205

表3 心理的QOL項目の回答分布

因子	No	項 目	度数 (%)		
			はい	どちらともいえない	いいえ
現在の満足感	Q1	あなたは今幸福だと思いますか	9 (4.4)	66 (32.2)	130 (63.4)
	Q2	今の生活に満足していますか	29 (14.1)	81 (39.5)	95 (46.3)
	Q3	今までの生活にかなり満足していますか	32 (15.6)	94 (45.9)	79 (38.5)
心理的安定	Q4	些細なことでも気にならなくなったと思いますか*	61 (29.8)	67 (32.7)	76 (37.1)
	Q5	些細なことでも気になって眠れないことがありますか*	39 (19.0)	49 (23.9)	117 (57.1)
	Q6	気分の落ち込むことがありますか*	109 (53.2)	52 (25.4)	44 (21.5)
生活のハリ	Q7	若い頃と同じように興味ややる気がありますか	50 (24.4)	89 (43.4)	66 (32.4)
	Q8	興味や楽しみごとをもって生活していますか	48 (23.4)	69 (33.2)	89 (43.4)
	Q9	何かやるときに、活力を持ってやっていますか	22 (10.7)	96 (46.8)	87 (42.4)

n=205

*は逆転項目

は「生活のハリ」のみに因子負荷をもつ因子構造となっている。この二次因子モデルについて、健常児を養育している母親において構成概念妥当性が検証される(斎藤ら、1999)⁷⁾ともに、S県内の心身障害児通園施設を利用する障害児に母親においても因子不変性が検討され(香川ら、2000)⁸⁾、測定尺度として妥当性が支持されている。

そのため、本研究では低出生体重児の母親サンプルに対する交差妥当性の検討と内部一貫性の確認を行った。得点化については、選択肢「はい」に2点、「どちらともいえない」に1点、「いいえ」に0点を与え、「心理的安定」の3項目は逆転項目であることから「いいえ」に2点、「どちらともいえない」に1点、「はい」に0点を与え、得点が高いほど心理的QOLが高いことになるよう設定した。確証的因子分析を行うために、その適合度指標には、 χ^2/df 、GFI、AGFIとRMSEAを採用した。

最後に「育児負担感」、「バーンアウト」、及び「心理的QOL」の関係性を検討した。分析モデルとして、「心理的QOL」を目的変数とし、「育児負担感」及び「バーンアウト」を心理的QOLの説明変数として設定し、この二者が心理的QOLにどのように影響を与えるかを明らかにするための因果関係モデルを構築した。共分散構造分析により、適合度によるモデル全体の評価と、変数間のパス係数を検討することで、構築した因果関係モデルの評価をした。モデル適合の評価には χ^2/df 、GFI、AGFI及びRMSEAを採用した。なお、 χ^2/df はモデルのデータへの適合度が低いほど大きくなるので、一般的には2ないし3より小さいことが適合度の高い妥当なモデルの条件とされている。GFIとAGFIは変数の全分散のうちモデルによって説明される部分の割合を示す指標であり、0.9以上の値を示すと十分な説明力や安定性を有すると判断される。RMSEAは0.08以下

であれば、そのモデルがデータをよく説明しているとされている。パス指数の有意水準は棄却比(Critical Ratio: CR値)で判断し、その絶対値が1.96(有意水準5%)以上を示したものを統計学的に有意とした。

以上の解析には、岡山県立大学保健福祉学部所有の統計ソフトSPSS7.5.2J for Windowsを用い、因子モデルと因果関係モデルの評価にはAMOS version3.6を使用した。

結果

1. 集計対象者の属性

送付票は276名、回収票は214名、回収率は78%であった。そのうち、属性、育児負担感、バーンアウト、及び心理的QOLに関する項目に欠損値がない者205名を集計対象として用いた。

集計対象者の平均年齢は37.9歳(標準偏差5.1歳)、範囲は25歳から51歳であった。なお、最終学歴、就労状況、同居家族数、世帯構成、子どもの数については表4に示した。

表4 対象者の属性

	カテゴリー	度数	パーセント
年齢	25歳~30歳	14	6.8
	31歳~35歳	48	23.4
	36歳~40歳	84	41
	41歳~45歳	45	22
	46歳~50歳	12	5.9
	51歳~55歳	2	1
	(平均年齢±標準偏差) (範囲)	37.93歳±5.07歳 25歳~51歳	
最終学歴	中学校卒	11	5.4
	高等学校卒	125	61
	短期大(専門学校)卒	53	23.9
	大学院卒	1	0.5
	その他	15	7.3
就労状況	社員・従業員	102	49.8
	家業(自営業)	23	11.2
	自宅で内職	10	4.9
	無職(専業主婦)	53	25.9
	その他	17	8.3
世帯構成	夫婦と子	87	42.4
	一人親と子	3	1.5
	夫婦と親と子	93	45.4
	四世帯以上	13	6.3
	その他	9	4.4
子どもの数	1人	33	16.1
	2人	83	40.5
	3人	72	35.1
	4人以上	17	8.3

n=205

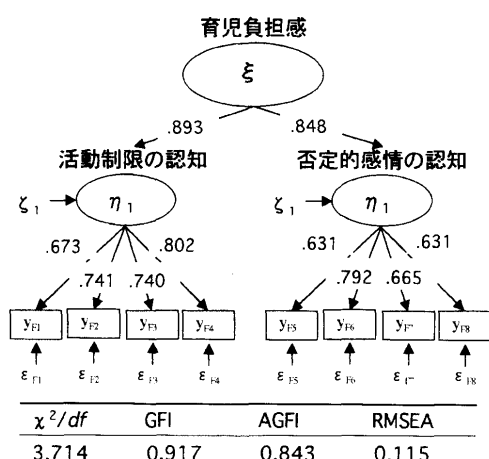


図2 「育児負担感」因子モデルの確証的因子分析結果（標準解）

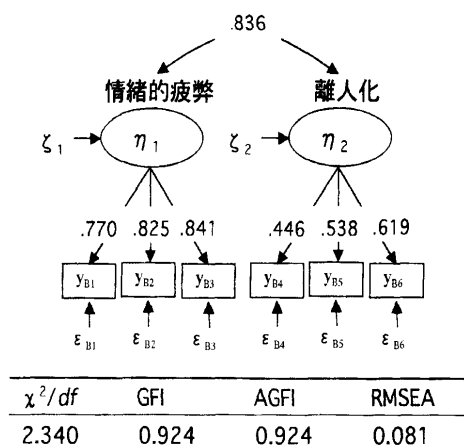


図3 「バーンアウト」因子モデルの確証的因子分析結果（標準解）

2. 因果関係モデルに使用する尺度の妥当性の検討

2-1 育児負担感尺度の妥当性検討

育児負担感に関する8項目の回答分布は表1に示すとおりであった。確証的因子分析を行った結果、 χ^2/df が3.714、GFIが0.917、AGFIが0.843、RMSEAが0.115を示し、 χ^2/df とAGFI及びRMSEAがやや不安な数値であるもののGFIに統計学的に有意な値が観察されたことから、交差妥当性が支持されたものと判断した（図2）。

育児負担感尺度の「活動制限の認知」の得点分布は、得点範囲が0～16点、平均得点が4.2点、標準偏差は3.2であり、「否定的感情の認知」と得点分布は、得点範囲が0～

15点、平均得点が4.8点、標準偏差は3.0であった（表5）。

2-2 バーンアウト尺度の妥当性検討

バーンアウトに関する6項目の回答分布は、表2に示すとおりであった。確証的因子分析を行った結果、 χ^2/df が2.340、GFIが0.924、AGFIが0.924、RMSEAが0.081と高い適合度を示し、すべてのパス係数に統計学的に有意な正値が示された（図3）。

バーンアウト尺度の「情緒的疲弊」の得点分布は、得点範囲が0～6点、平均得点が4.0点、標準偏差は1.5であり、「離人化」の得点分布は、得点範囲が0～5点。平均得点が4.0点、標準偏差は1.1であった（表5）。

表5 尺度の得点分布と相関係数

尺度	得点範囲	平均得点	標準偏差	相 関 係 数				心理的QOL
				活動制限の認知	否定的感情の認知	情緒的疲弊	離人化	
活動制限の認知	0-16	4.2	3.2	—				
否定的感情の認知	0-15	4.8	3	0.597*	—			
情緒的疲弊	0-6	4	1.5	0.702*	0.590*	—		
離人化	0-5	4	1.1	0.444*	0.592*	0.57*	—	
心理的QOL	0-18	11	4.6	-0.365*	-0.333*	-0.421*	-0.371*	—

n=205 *p<.01

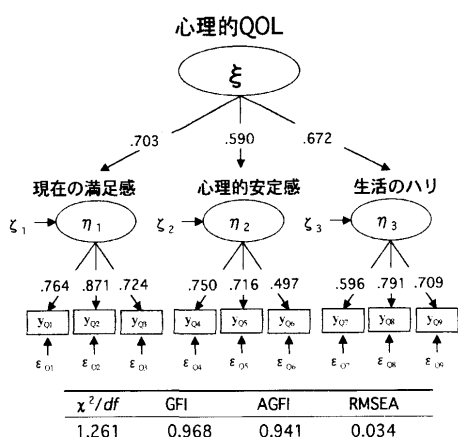


図4 「心理的QOL」因子モデルの確証的因子分析結果(標準解)

2-3 心理的QOL尺度の妥当性の検討

心理的QOLに関する9項目の回答分布は、表3に示すとおりであった。確証的因子分析を行った結果、 χ^2/df が1.261、GFIが0.968、AGFIが0.941、RMSEAが0.034と高い適合度を示し、すべてのパス指数の統計学的に有意な正値が示された(図4)。

心理的QOL尺度の得点分布は、得点範囲が0~18点、平均得点が11.0点、標準偏差は4.6であった(表5)。

3. 因果関係モデルの検討

3-1 育児負担感及びバーンアウトと心理的QOLに関する因果関係モデルの検討

「育児負担感」、「バーンアウト」及び「心理的QOL」の各尺度は、高次因子モデル、斜交因子モデル、高次因子モデルとして成立し構成概念妥当性が支持されたことが確認された。なお、3尺度の素点合計得点の分布と変数間の相関係数を算出した。表5に示すとおり、心理的QOLとの相関係数は、育児負担感に「活動制限の認知」が-0.365、「否定的感情の認知」が-0.333、バーンアウトの「情緒的疲弊」が-0.421、「離人化」が-0.371といずれも1パーセント水準で有意な相関が認められた。

本研究では、観測変数と潜在変数を用い

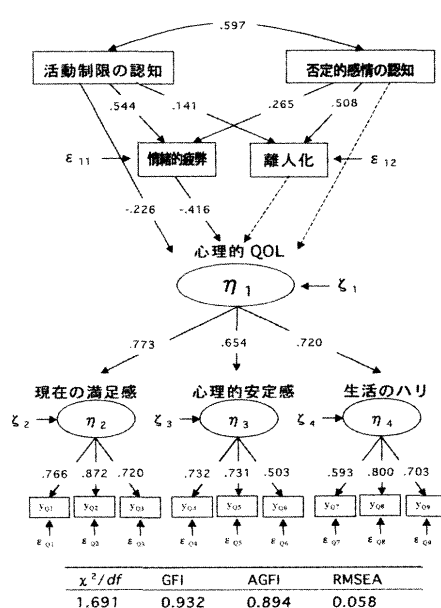


図5 育児負担感およびバーンアウトと心理的QOLに関する因果関係モデルの分析結果(標準解)

た因果関係モデルを構築し、共分散構造分析によりモデルを検討した。その結果、 χ^2/df が1.691、GFIが0.932、AGFIが0.894、RMSEAが0.058といずれも統計学的な許容水準を満たし、データは本因果関係モデルを支持した。(図5)

次に各パス係数について検討すると、育児負担感の「活動制限」と「否定的感情」からバーンアウトの「情緒的疲弊」へのパス係数はそれぞれ0.544、0.265と統計学的に有意な規定力が認められ、その寄与率は0.538であった。また、育児負担感の「活動制限」と「否定的感情」からバーンアウトの「離人化」へパス係数はそれぞれ0.141、0.508と統計学的な規定力が認められ、その寄与率は0.363となり、育児負担感の「活動制限」と「否定的感情」がバーンアウトの「離人化」に分散の36%を説明できることを示した。

育児負担感の「活動制限」から「心理的QOL」へのパス係数は-0.226であり、バーンアウトの「情緒的疲弊」から「心理的QOL」へのパス係数は-0.416であった。な

お、育児負担感の「否定的感情」から「心理的QOL」へのパス係数と「離人化」から「心理的QOL」へのパス係数は小さな負値となり、Wald 検定でCR値を検討した結果、パス係数が0であるとする仮説は棄却されなかった。なお、「心理的QOL」の寄与率は0.391となり、「心理的QOL」分散の39%を説明できるという関係性が確認できた。

3-2 育児負担感及びバーンアウトと心理的QOLに対する直接効果及び間接効果

心理的QOLに対する直接及び間接効果の分析結果は表6のとおりである。育児負担感の「活動制限」から「心理的QOL」へ直接効果は-0.226、「情緒的疲弊」を介する間接効果は-0.226、総効果は-0.452であった。育児負担感の「否定的感情」から「心理的QOL」へ「情緒的疲弊」を通じて及ぼす間接効果は-0.110であり、バーンアウトの「情緒的疲弊」から「心理的QOL」の直接効果は-0.416であった。心理的QOLに対する各直接及び間接効果を比較すると「情緒的疲弊」からの直接効果が最も大きい、「活動制限」は直接効果と「情緒的疲弊」を介する間接効果を加えると同程度である。

育児負担感の「否定的感情」から「心理的QOL」への直接効果、「離人化」を通じて及ぼす間接効果はパス係数が小値で意味のないものとなったため算出されなかった。

なお、「育児負担感」と「バーンアウト」から「心理的QOL」へ寄与率は0.391であり、育児負担感の「活動制限」から直接的な影響とバーンアウトの「情緒的疲弊」を經由

した間接的な影響の両者によって「心理的QOL」の分散の39%を説明できるという関係性が確認できた。

考察

1. 研究手続きと統計解析

本研究は極低出生体重児を育児している母親を対象とし、母親のQOLに関与する要因間の構造を明らかにすることをねらいとし、共分散構造分析を用いて育児負担感及びバーンアウトが心理的QOLへ影響するという因果関係を実証的に検討した。

統計解析には、次の二つの手続きを採った。第一に採用した育児負担感、バーンアウト、心理的QOLの尺度を確証的因子分析によって、低出生体重児を育児している母親サンプルにおける測定尺度としての妥当性を検討した。第二に変数相互間の関係性の検討を共分散構造分析を導入して行った。

共分散構造分析では、自ら設定したモデルの適否が判断でき、さらにひとつの説明変数が他の目的変数にもなるような複雑なモデルも表現できるというメリットがある。構築したモデルを収集されたデータに当てはめた際、適合の度合いが明らかにされ、さらにデータに対して提起された理論を反映したモデルを構成できることから、仮説の検討を行う上で有用であると考えられた。以上の特徴を持つ共分散構造分析は、育児負担感とバーンアウトの2つの説明変数と心理的QOLという目的変数間の関係性をモデル上に反映させることが要件であった本研究にとって適切であったと考えられた。

表6 心理的QOLに関する直接・間接効果の分析（標準解）

目的変数	決定係数	説明変数	直接効果	間接効果	総効果
心理的QOL	0.356	活動制限の認知	-0.226	-0.226	-0.452
		否定的感情の認知	-	-0.110	-0.110
		情緒的疲弊	-0.416	-	-0.416
		離人化	-	-	-

2. 因果関係モデルに使用する尺度の妥当

2-1 育児負担感尺度の妥当性

障害児を育児する母親のストレス評価に関する領域では、育児負担感とストレス症状を区別すべきとする提案がGlidden(1993)⁹⁾によってなされたが、それが測定内容に反映された尺度は国内外において、中島ら(1999)の「母親育児負担感に関する尺度」と除いてほとんど開発されていない。「母親育児負担感に関する尺度」はLazarusのストレス認知理論¹⁰⁾を背景として開発されたものであり、ストレスサーに対するネガティブな認知を、子どもに対する否定的感情の認知と育児によって派生する母親の社会的な活動制限の認知で測定する尺度である。さらに、この尺度は子どもの属性に規定されずどのような母親にも観察される内容の測定を企図して考案された尺度であり、測定尺度としての妥当性と信頼性は評価されており、低出生体重児を育児している母親を対象とする本研究にとって適切な選択であったといえる。

本研究の母親サンプルにおいても、統計学的に有意な値が観察されたことから、構成概念の交差妥当性が支持されたものと判断された。したがって「育児負担感」を二次因子、「活動制限の認知」と「否定的感情の認知」を一次因子とする高次因子モデルを育児負担感尺度として扱うことは妥当と判断された。

2-2 バーンアウト尺度の妥当性

バーンアウトに関する研究は、主にその発生機序や軽減の要因を探る実証的な研究を中心に行われてきた。バーンアウト測定に最も多く用いられてきたのは、「情緒的疲弊」、「離人化」、「自己成就」という3つの下位概念から構成されるMBIであるが、この3つの下位概念間に因果関係が存在するかについては一致した見解は現在のところ

示されていない。

本研究で設定した「情緒的疲弊」と「離人化」の2つの下位概念から成る2因子斜交モデルは、原田ら(2000)の知見¹¹⁾や中谷(1992)の痴呆高齢者の介護者の研究¹²⁾などに基づき、内容的に妥当と考えた。確証的因子分析の結果、前記のモデルのデータに対する適合度が統計学的な許容水準を満たしていることから、構成概念妥当性を支持する強い証拠と考えられ、本低出生体重児を育児する母親のバーンアウトを測定する尺度として適切であると判断された。

2-3 心理的QOL尺度の妥当性

近年、医学的リハビリテーション領域において脳卒中患者の生活満足度を中心にその概念の研究は進んできた。Fuhrer(1994)は、その定義を「個人がおかれている状況に対する包括的な認知」としている¹³⁾。構成概念妥当性が検討されるようになったのはその統計ソフトが普及しはじめた比較的最近のことで、古谷野ら(1990)の研究¹⁴⁾が最初である。その後、石原ら(1992)によって高齢者を対象として「QOL指標」が開発されている¹⁵⁾。この「QOL指標(9項目版)」は、齊藤ら(2000)によって健常児にいて構成概念の妥当化が行われ、因子構造の不変性が吟味されている。さらに、香川ら(2000)により障害児の母親のおける交差妥当性が検討され、因子構造の比較や不変性が吟味された尺度である。したがってその妥当性と信頼性は高く評価され、低出生体重児を育児している母親を対象とする本研究にとって適切な選択であったといえる。

本研究の極低出生体重児を育児している母親サンプルにおいても、高い適合度と共に構成概念妥当性が支持されたことで、「心理的QOL」を二次因子、「現在の満足感」、「心理的安定」、「生活のハリ」を一次因子と

する高次因子モデルを心理的QOL尺度として扱うことは妥当と判断された。

3. 育児負担感及びバーンアウトと心理的QOLに関する因果関係の検討

本研究で目的変数として採用した心理的QOLや説明変数として育児負担感及びバーンアウトは、因子構造がそれぞれ高次因子モデル、高次因子モデル及び斜交因子モデルとして成立し、構成概念妥当性が支持されたことが確認された。

育児負担感とバーンアウトの関係を見た場合、育児負担感の「活動制限の認知」はバーンアウトの「情緒的疲弊」に強く、「離人化」に弱い影響力を持ち、また育児負担感の「否定的感情の認知」はバーンアウトの「離人化」に強く、「感情的疲弊」に弱い影響力を示した。

バーンアウトと心理的QOLの関係を見た場合、バーンアウトの「情緒的疲弊」は心理的QOLに負の影響を持つが「離人化」はほとんど影響力を持たないことが明らかとなった。

育児負担感から直接的に心理的QOLにかかる影響力を見ると、育児負担感の「活動制限の認知」は心理的QOLの負の影響を示すが「否定的感情の認知」はほとんど影響を示していないことが明らかになった。

このことから、育児負担感が心理的QOLに与える影響は、育児負担感の「活動制限の認知」から直接与えるものとバーンアウトの「情緒的疲弊」を経由するもの、バーンアウトの「感情的疲弊」から直接与えるもの、「否定的感情の認知」からバーンアウトの「感情的疲弊」を経由するものの4経路があることが分った。

一方、育児負担感の「否定的感情の認知」からバーンアウトの「離人化」に影響を与えるものの、「離人化」を経由して心理的QOLへの影響力はほとんどなく、「否定的感情

の認知」から心理的QOLに直接的な影響力がほとんどないことが分った。

したがって、極低出生体重児を育児している母親の心理的QOLは、育児負担感の「活動制限の認知」から直接的に、あるいは、バーンアウトの「情緒的疲弊」を経由して間接的に負の関係性があり、育児負担感の「否定的感情の認知」からバーンアウトの「情緒的疲弊」を経由して間接的に負の関係性があることが実証された。また、育児負担感の「活動制限の認知」と「否定的感情に認知」はバーンアウトの「情緒的疲弊」と「離人化」のいずれにも正の関係性が認められ、バーンアウトの「情緒的疲弊」は心理的QOLに負の関係性が認められるが、「離人化」には関係性が認められなかった。

育児負担感の「活動制限に認知」はプライベートの確保や自由な社会活動の参加が困難であることを表し、「否定的感情の認知」は子どもの行動や心理状態の理解が困難でそのことを母親自身がいらだつことを表している。育児負担感とバーンアウトの関係では、「活動制限の認知」がバーンアウトの「情緒的疲弊」に強い影響があるということから、母親自身の自由な時間がもてないことが、子どもの世話に自分だけが追われているという感覚を増強させているといえる。

次に心理的QOLに対する関係性をみると、バーンアウトの「情緒的疲弊」が最も影響が大きいが、「活動制限の認知」が「情緒的疲弊」を経由した場合としないで直接の場合の合計とほぼ同等に負の影響を与えているとの結果であった。このことは、バーンアウトの「情緒的疲弊」が心理的QOLとの関係で大きな意味を持っている。育児負担感の「活動制限の認知」や「否定的感情の認知」は「情緒的疲弊」を経由することで心理的QOLに影響を及ぼすこととなる。母親の育児に対する「自分だけが世話をしている疲れた」という感情が生活の満足感や

安定感に影響する大きな要因になっていることが分る。

一方、育児負担感の「活動制限の認知」と「否定的感情の認知」はバーンアウトの「離人化」と正の関係性が認められたが、「離人化」と心理的QOLの関係性は認められなかった。

まとめと課題

低出生体重児の育児では、母親の社会活動が自由にできる時間を提供する、プライバシーが確保できるような環境を整備するなど家族や社会の支援体制を整えれば、母親は自分ひとりに育児を任されているのではないという認識を持ち生き生きと生活し、子どもの成長とともに母親自身の人格も形成されていくものと推量される。

本研究では、低出生体重児を育児している母親の心理的QOLと育児負担感、バーンアウトとの関係性を共分散構造分析した結果、構築したモデルが低出生体重児を育児している母親のデータに適合することが実証され、さらに、心理的QOLについて関係性を実証し、低出生体重児を育児している母親の心理的QOLを規定する要因間の構造に関して確証が得られた。しかし、心理的QOLを規定する要因は本研究で取り上げたストレス認知やストレス反応以外に、Lazarusのストレス認知理論によれば、コーピングやソーシャルサポートなども考慮すべきであると思われる。今後、さらにバーンアウトに陥らないようにするためのストレス対処方略や、育児支援・療育指導などのソーシャルサポートなどの他の規定要因を析出することが課題であろう。

また、本研究の結果は低出生体重児を育児している母親についてのものであり、健常児を育児している母親や重度心身障害児を育児している母親など他の集団の母親との比較検討が行われていない。今後、他の

集団に属する母親を対象にして同じ研究モデルで調査分析を行い、交差妥当性・因子不変性を得て、低出生体重児を育児している母親の特性を浮き彫りにすることが必要であろう。

また、縦断的研究を行い、低出生体重児の属性の細分化と明確化を行うことが、低出生体重児を育児している母親の心理的QOLに関する関係性をより明確にすると考える。

文献

- 1) 中嶋和夫, 斉藤友介, 岡田節子: 育児負担感に関する尺度化, 厚生指針, 46(3): pp11-18, 1999
- 2) 原田和宏, 斉藤友介, 布元義人, et al.: バーンアウト尺度のプロセスモデルの検討, 東京保健科学学会誌, 13(1): pp38-46, 2000
- 3) 斉藤友介, 岡田節子, 板垣葉子, et al.: 保育園を利用する母親におけるQOL指標因子構造モデルの妥当性に関する検討, 大東文化大学紀要, 37: pp37-46, 1999
- 4) 中嶋和夫, 斉藤友介, 岡田節子: 育児負担感指標に関する因子不変性の検討, 東京保健科学学会誌, 2(2): pp176-183, 1999
- 5) 岩田香織, 岡田節子, 為我井浩, et al.: 育児負担感尺度の交差妥当性の検討, 静岡県立大学短期大学部紀要, 13(2): pp213-219
- 6) 原田和宏, 斉藤友介, 布元義人, et al.: 特別養護老人ホーム介護職員におけるバーンアウト尺度の因子モデルの検討, 老年社会科学, 22(1): pp46-58, 2000
- 7) 斉藤友介, 為我井浩, 林仁実, et al.: 健常児と障害児の母親におけるQOL因子構造の比較, 大東文化大学紀要, 38: pp205-212, 1999
- 8) 香川スミ子, 岡田節子, 中嶋和夫: 障害児の母親におけるQOL指標の妥当性, 聖カタリナ女子大学研究紀要, 12: pp59-69,

2000

- 9) Glidden, L.M. : What we do not know about families with children who have developmental disabilities : Questionnaire on resources and stress as a case study. American Journal on Mental Retardation, 97(5) : pp481-495, 1993
- 10) リチャード・S・ラザルス, スーザン・フォルクマン : ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—, 実務教育出版, 2000
- 11) 原田和宏, 齊藤友介, 津田洋一郎 : 在宅脳血管障害後遺症におけるQOL指標の構成概念妥当性の検討, 理学療法学, 27(7) : pp229-236, 2000
- 12) 中谷陽明 : 在宅障害老人を介護する家族の燃えつき—Maslach Burnout Inventory 適応の試み—, 社会老年学, 36 : pp15-26, 1992
- 13) Fuhrer, M.J. : Subjective well-being : Implications for medical rehabilitation outcomes and models of disablement. American Journal of Physical Rehabilitation, 73(5) : pp58-364, 1994
- 14) 古谷野旦, 柴田博, 芳賀博, et al : 生活満足度尺度の構造—因子構造の不変性, 老年社会学, 12 : pp102-116, 1990
- 15) 石原治, 内藤佳津雄, 長嶋紀一 : 主観的尺度に基づく心理的側面を中心としたQOL評価表作成の試み, 老年社会科学, 14 : pp43-51, 1992